
気まぐれ魔王のお気に入り(ペット的な意味で)

かいと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ魔王のお気に入り（ペット的な意味で）

【Nコード】

N3317P

【作者名】

かいと

【あらすじ】

異世界にトリップしてしまった女子高生の主人公は、生活していた村を襲った魔物に連れ去られた。

『封破り』という特殊能力持ちらしいが、今一つ自身では実感が無い。

そしてその能力で魔王の眠りを解いてしまった主人公は、そのまま魔王に気に入られ、彼のペットとされてしまったのだった。

そんな感じです。

恋愛に行くかは不明。

ぬるくですが残酷っぽい描写あり。書き溜めて投稿するのでちょっと進みが遅いと思います。

1 現在平穩に生活中（前書き）

初めての投稿です。

よろしく願います。

1 現在平穩に生活中

異世界トリップ、という設定があることは知っていた。

友達が貸してくれたライトノベルのいくつかにも、その設定が使われてたから。

「こういう非現実的な話っていいよねー」とか話して、『異世界に行っちゃうやつ』って言った時に、『異世界トリップ』って単語を教えてもらったんだ。

まあとにかく、普通に暮らしてた人が、ある日突然全く知らない世界へ弾き飛ばされて、そこで重大な使命を負う『設定』を、私は知っていた。

知ってはいたが、しかし。

「……私は手違いなんじゃないだろうか」

あの日から何度呟いたかも知れない言葉を呟きつつ、私は水桶を見下ろした。

ついさっきくみ上げた井戸水が中に入っていて、ゆらゆらと揺れている。

手を入れたら冷たくて気持ちいいことは知ってるけど、これは飲み水になるから、そんな汚いことはしない。

「よいしょっと」

手を伸ばして桶の取っ手を掴み、そのまま持ち上げる。

両手でどうにか持てる程度の重さのそれを揺らしながら、私は本日二度目になる帰路を歩いた。

長いスカートが足に纏わり付くのを、蹴り飛ばすようにしながら歩く。

本当はパンツルックになりたいんだけど、そういう服は男性のものだから、私はもらえていない。

ゆっくりと歩きながら、私は周囲を見やった。

牛を引いて歩いていく人、果物を並べて客を呼び込む人、行きかう行人、きやあきやあ騒ぐ子供たち。

何処にでもある、のどかな風景だ。

ここが日本ではないという前提を置けば。

「……………はあ……………」

溜息をこぼし、私は桶の取っ手を握る手に力を込めた。

この大陸は、レニアと呼ばれているらしい。

そんな地名、私は日本で生きてきて一度も聞いたことがない。

普通の女子高生だった私は、いつものように駅へ向かって歩いていた。

いつもと同じビルの側を歩いて、今何時だったかと携帯に触れようと鞆に手をやったそのとき、急にぐらぐらと世界が揺れた。

それは大きな地震で、地震だ！　って叫ぶ男の人の声とか、女の人の悲鳴も聞こえた。

立っていられないほどの横揺れに転んで、更にそのまま体が横に滑るような感覚があつて。

あれは確実に震度4とかそんなものじゃないと思う。

それからふと物音を感じて上を見やった私は、ビルのガラスが割れて、自分のところへ降り注いでくるのを見た。

ゆっくり落ちてくるように見えたガラスはとてもいっぱい、大きくて、鋭そうで、絶対死んだと思った。

なのに死なないまま、気付けば私は野原に落ちていたのだ。

倒れて気絶していたらしい私を起こしてくれたのは、ちょうど通りかかったという行人のおじさんで、私は生まれて初めて馬車に乗ってこの村まで送ってもらった。

茶髪で青い目の、明らかに外国人っぽいおじさんだったけど言葉は通じたから、私はそのとき感じた質問を全部ぶつけた。この大陸がレニアって名前だと教えてもらえたのもそのときだ。

おじさんにとってはおかしな質問をしていた私のことを、おじさんは魔物に襲われて記憶を失ってしまったかわいそうな子、だと思ってくれたらしい。

そのままおじさんの知り合いに預けられて、今に至っている。

「ミツ、どこへいくんだい？」

ぼんやりと歩いていたらどうやらいつもの戸口を通り過ぎていたらしく、その声が掛けられた。

慌てて振り向けば、茶色の髪で青い瞳をしたおばさんが、私のほうを見て小さく笑っている。

行商人のおじさんから私を預かってくれた、ティアルダさんだ。

「あ、ごめんなさい」

慌てて踵を返して、私は彼女が佇んでいる戸口へと近付いた。身を引いてくれたティアルダさんの横を通って、戸口から中へと入る。

そこは台所で、今の戸口はよくいう勝手口というやつだ。

さつきと同じように台所の角にある水瓶へ近付いて、それから両手で持ち上げた水桶をその上で傾ける。

じゃばあああ、と音を立てて、綺麗な水が中へと転がり込んでいった。

「ご苦労様。今日はこれで大丈夫よ」

私の横から水瓶を覗き込んで、ティアルダさんがそう言った。

「はい、わかりました」

そう答えてから桶を下ろして、いつもの場所へと片付ける。
それから振り返って、私はティアルダさんを見た。

「次は何をしますか？」

「アンタはそればかりだね」

訊ねた私に、ティアルダさんが苦笑する。

今のところはもう用事は無いよ、と寄越された言葉に、そうす
か、と肩を落とした。

この家に引き取られてから、もう三ヶ月が経つ。

得體も知らない人間を引き取ってくれたんだから、できるだけ役
にたいたいと思っていた。

だって、私が居るだけでエンゲル係数も上がったろうし、私が今
着ている服はティアルダさんがくれたものだ。

どうやら私が着ていた学生服はこの世界では破廉恥らしく、一度
取り上げられてしまって、もう着ないことを条件に返してもらった。
ティアルダさんが用事は無いというのなら、何か自分で仕事を探
したほうがいいんだろうか。

そんなことを考えていたら顔に出ていたのか、目の前のティアル
ダさんが溜息を吐いた。

「いい、ミツ。私は女中を雇ったわけじゃないんだから、そうかし
こまらなくていいんだよ？」

言い放たれて、それは分かってます、と頷く。

そうしてティアルダさんを見つめると、私の目を見返した彼女が、

仕方無さそうに笑った。

「それじゃ、これから昼食まで、アンタは部屋で文字の勉強をしていなさい。まだ思い出していないんだろ？」

「……はい」

言われた言葉に頷いて、私はティアルダさんの前から足を動かした。

ありがたいことにもらえた部屋へと移動して、中に入ってから小さなテーブルへ向かう。

そこにおいてあるのは付けペンと長い紙と一冊の本で、昨日と同じ椅子に座ってからそれを見下ろし、うーん、と小さく唸った。

「……まさか、この年になって文字を覚えなおすなんて……」

やれやれと息を吐きつつ、本を手取る。

言葉は通じたというのに、私は文字が読めなかった。

それはティアルダさんからお使いを頼まれたときに発覚したことで、メモを渡されても読めなかった私がそう申告したとき、ティアルダさんは変な顔をした。

それでも、すぐに何かを思い出したように顔を曇らせて、そつと頭を撫でてくれた。

多分、おじさんが言っていた『記憶喪失』っていうのを思い出したんだろう。

騙してるようで気が引けるけど、それ以外にちゃんとした理由を話せないから、まだ否定したことはない。

だって、異世界から来ましたなんて、うさんくさいにも程がある。怪しい奴だって分かったら、いくら優しいティアルダさんだって私を追い出すだろう。

卑怯者な私は、自己保身の為に彼女に嘘をついて、その代わり尽くすことを選んだのだ。

なんて、胸のうちに呟いてから、私はぱらりと本を捲った。

中身は文字を習う小さな子供向けのもので、分かりやすいイラストの横に、それが何であるかを示すものが書かれている。

まずは単語を覚えなくちゃいけないから、私はそれを見つめ、そしてペンを掴んで紙の上に滑らせた。

言葉は通じるから、その絵が何であるかは初日にティアルダさんに聞いてある。

「りんご、つと」

さらさらと書いてみる。

一応そつくりに書き写してから、隣に何回も同じようにその文字を書いた。

どう見ても四文字なんだけど、これを発音すると『りんご』になるのだ。

成績は悪かったけど、せめて英語だったら良かったのにな、なんて思いながら、同じ作業を二ページ分続けると、長かった紙は殆どが埋まってしまった。

「んー……っ」

軽く伸びをしながら、インクが乾くのを待つために紙を机の上に大きく広げる。

帰る方法が分からない以上、私はこの世界で生きていかなくちゃいけない。

そのためには生活に必要なことを覚えていかなくてはならないのだと分かっているけど、文字の勉強は一行に進んでいなかった。

絵と一緒に見ればそれが何かは分かるけど、文字だけ見てもすぐ

には分からない。

これじゃ文法なんてまだまだだ、と思うとちよつと絶望的な気分になる。

「……いやいや……私はやれば出来る子……やれば出来る子だ……」

ちよつと自分を奮起させてから、私は教科書代わりの幼い本を両手で持った。

とりあえずインクが乾くまでの間も本を読んでおこうと、何度も捲ったページをぱらぱらと捲る。

描かれている絵が何のことなのかは殆ど分かる。

りんごも馬も卵も、私が知っているものと違わない。

時々王様とか城とかお姫様とか王子様が出てくるけど、この辺は許容範囲。

魔法って単語も、まあいいかなと思う。

しかし、これはどうだろうか。

「……まもの」

奇怪な生きもののイラストを見つめて、ぼつりと呟く。

その横にはおどろおどろしい黒い影のイラストがあって、それは『まおう』だった。

詳しくは知らないけど、この世界には魔王が居て、そいつが操る魔物があちこちを歩いているらしい。

行商人のおじさんは私のことを魔物に襲われた人間だと疑っていなかったし、ティアルダさんもそうだった。

それから、この村からかなり離れたところには王都があって、そこにはお城があって王様が居て、魔王を倒す勇者が現れるのを待っているらしい。

「……とてつもなくベタだよね」

まるで、ゲームとか絵本とか小説とか漫画とかアニメとか、そういう類の世界だ。

だとすれば異世界人な私こそその勇者なんじゃないかと思ったけど、勇者と言うのは金髪の男であることが確定しているらしいので私は該当しない。いや、該当したくはないけど。魔王と戦うとか怖すぎる。

けれど、ならばどうして私はこの世界に居るんだろうか。

夢なんじゃないかと思って頬を摘んでみても、痛いだけで目は覚めない。

おなかはずくしご飯は美味しいし、お風呂も入るしトイレも入る。ここ三ヶ月のことはすっかり覚えてるし、手には水桶を運ぶようになって出来た豆だってある。

夢だというのなら、もう覚めたっていいのに。

けれど目が覚めないということは、きっとここは現実なのだ。

「……………私は何かの手違いなんじゃないだろうか」

ぼんやりといつもの言葉を呟きながら、私はそつと本を閉じた。

もしかしたらあの時、私のすぐ近くに勇者になるべき人がいて、その人が連れてこられる場所に私は連れてこられたんじゃないだろうか。

そこまで考えてみるけど、確証をもてないものだからなんとも言えない。

とにかく私に出来ることは、帰る方法が見つかるまで、この世界で生きていくことだけだ。

本当は、今すぐにでも帰りたい。

帰って、お父さんやお母さんに会いたいし、友達とも話がしたい。

本当に、この世界が夢だったらどんなに良いだろう。

はぁ、ともう一度溜息を吐いてから、私はちらりと窓を見やった。窓の外は青空で、いつものように眩しく太陽が輝いている。

そっと手を伸ばして紙に触れて、インクが乾いているのを確認してから、私はそれをくると裏返した。

そして、雑念を払うべく写経するお坊さんみたいに、本から単語を書き写していく。

ご飯だよとティアルダさんに呼ばれるまで、私はその作業に没頭した。

そうやって、私は平穩に、異世界で生きていた。

2 騙されました

「ごうごう、と炎が村を舐めていく。

何が起こったのか分からなくて、私はそれを見やった。

私がこの世界にきて、もうかなりの時間が経つ。

夕闇に包まれた村には今、赤い炎が燃え盛っていた。

魔物だ、と誰かが叫んで、ばたばたと走って逃げていく。

女の人の悲鳴も聞こえるし、助けて助けてと叫ぶ人も居る。

村のずっと向こうに、羽を広げる爬虫類が炎を吐き出すのが見えた。

目の色までは見えないけど、真っ赤なうろこをしている。

あれって、ドラゴンだろうか。

あまりにも現実感がなくて、私は眉を寄せた。

けれど、炎の音は本物だ。熱いし、風が焦げ臭い。

「ミツ！ ほら、おいで！」

声を掛けてきたティアルダさんが、そうして私の手を引いた。

ぐいぐいと引かれるままに駆け出したところで、視界の端に泣いている子供が映る。

それを見たときに足が止まって、そのままティアルダさんの手を振り払った。

「ミツ!?!」

「先に行ってください、すぐに追いかけますから！」

驚いたようにこちらを見たティアルダさんに言い放って、先ほどの子供のところへと足を向ける。

小さなその子は女の子で、人形を抱えたまま顔を伏せて、物陰で泣いていた。

「ねえ、大丈夫!？」

すぐさま近付いて、きょろりと周囲を見回す。

周りに親らしい人の姿は見えない。

もしかして、こんなにも小さな子供を置いて逃げたんだろうか。

それだったら避難所へ連れて行けばいいだろうけど、もしこの子を探して火の中に飛び込んでいたりなんかしたら、と思うと胸が痛くなる。

とりあえず屈みこんで、私は女の子の顔を覗き込んだ。

「ね、泣かないで？ ほら、お姉ちゃんがだっこしてあげるから」

とりあえずこの子を先に避難させようと、そう思って子供に触れる。

その手を、がし、と子供が掴んだ。

女の子の泣き声は消えていて、え、と声が漏れる。

子供の力とは思えないくらいに強く手を握られて、引き剥がせない。

「ちょっと……」

「賭けは俺の勝ちだぜえ、アルフォルトお」

ニタリ、と女の子が笑った。

そしてその口から漏れたのはひび割れたような男性のもので、驚いて眼を見開いた私の前で、女の子が髪をざわめかせる。

「なんだ、いまだき奇特的な奴がいるもんだな」

真上から声が落ちて、振り仰げば、ずっと遠くに居た筈のドラゴンっぽい魔物が、建物の上から私達を見下ろしていた。

息を吐くたびに、その口元から小さく炎が吹き出ていく。

「女なんてのは単純だし、庇護欲が強ええからなあ。とりあえず賭けた通りい、捕まえた連中を先に喰うのは俺だぜえ」

「まあ、五匹は捕まえたからな。好きにしろよ、ベルティルデ」

そんな会話を聞きながら、自分がどういう事態に陥っているかをようやく把握して、私は正面に視線を戻した。

目の前の女の子が、ばきばきと音を鳴らして背を伸ばし、その体を異形へと変えていく。

つりあがった金色の目が私を見下ろして、その口が裂けたような笑みを浮かべる。

「じゃあなあ、諦めろよ、お人よしい」

つまり……私は、騙されたのだ。

+++

化け物みたいな奴とドラゴンっぽい奴に捕まった私は、そのまま村から連れ去られた。

場所はよく分らないけれど、連れてこられたのは洞窟の奥地で、檻の中には私以外にも何人かの人が居た。

それぞれが絶望的な顔をしていて、怯えたように端に縮こまっている。

「美味しく頂いてやるぜえ」

ニタニタと笑った化け物が私を突き飛ばして、そのままゆっくりと歩みを進め、奥でがたと震えている女性に向かった。村で見たことがある人だ。名前は知らない。

「ほら、こいよお」

「いや、やめ……っ！」

「大丈夫、痛いことはしねえよお？　ちょーっと齧って、舐めて、啜って、食べつくすだけだあ」

小さな子を唆すような言葉に、いやぜんぜん大丈夫じゃないだろう、と思った。

けれど、それを止めることなんて出来ない私は、そのまま化け物が女の人を引き摺っていくのを見送ることしか出来ない。

先ほど私が入ってくるときに開かれた檻の扉が、ぱたんと閉ざされる。

「いや……いやあああああああ！」

女の人の悲鳴が響いて、そして消えていった。

しん、としたその場所で、改めて私は周囲を見回す。

暗いけど周りが見えるのは、洞窟の壁に生えているコケの所為だ

ろうか。

私を除く四人は、全員男性だった。

怪我をしている人もいるし、服がこげている人もいる。

見たことがある顔もあるけど、名前は分らない。

それぞれが絶望的な顔をしているのを見てから、私はそつと端へ移動して、そこで膝を抱えた。

さっきの化け物は、多分『魔物』だ。

ドラゴンっぽい『魔物』に呼ばれていた名前は、確かベルティルデ……ベルティルデ、さん。

ドラゴンっぽい奴はなんだっけ。アルフォンス……じゃなかった。確か後ろにはトが付いてた。

とりあえず、ベルティルデさんの言うことからすると、私達は彼らに食べられてしまっただろうか。

ぞく、と背中を走った冷たさに、そつと眉を寄せる。

手を振り払ってしまった、ティアルダさんを思い出した。優しい人だから、きっと私のことを心配しているだろう。

「……」

こんな、家族も居ない世界で、私は死ぬんだろうか。

そう思うと、怖くてたまらない。

心臓が痛い。

泣きそうだけど、何に対して涙が出そうなのかも分からなくて、ぎゅっと拳を握ってそれに耐えた。

きっと、他の人も私と同じ感情を抱いているんだろう。誰も何も言わないまま、しんとした部屋の中に、ぴちよんぴちよん、と何処かで水が落ちる音がした。

そうして押し黙ったまま、十分も過ぎた頃だろうか。

ふと気付いて、私は檻の扉を見やる。

扉には、鍵が付いていない。

なら、出られるんじゃないだろうか？

ここがどこかは分からないけど、ここで座っていても食べられるだけなら、檻から出て逃げるほうが得策だ。

そつと立ち上がって、扉へ近付く。

「……おい、何してるんだ」

私の動きに気付いたのか、隅に座っている男性の一人が、私へその声を掛けた。

立ち止まって見やれば、私のほうを見ている男の人が、軽く首を横に振る。

「その扉には術が掛かっている。開けられないよ」

無駄なことは止めなさいと諭すように言われて、だからこの人たちもここに残っているのか、と私は納得した。

それから、その、術が掛かっているらしい扉を見る。

でも、今いちそう見えない。

そつと手を伸ばして、扉を掴んだ。

そのまま、ぐい、と押しやる。

すると、扉はなんの抵抗も無く開いて、きい、と少しさび付いた音を立てた。

「……………あれ？」

言われたことと違うぞと首を傾げてから、私は後ろを見やる。

そこには、あっけに取られたような顔をした男の人たちが居て、ぱちりと瞬きをした。

「えっと……………もしかして、さっき、術っていうの掛けていくの、忘

れたんですかね？」

鍵の掛け忘れみたいなものだろうか、と思いながら訊ねる私を見ていた男の人たちが、ふらふらと立ち上がる。

「……開いた……」

「出られる……」

「出られるぞ！」

「急げ！」

そうして全員で声を上げて、四名が私の居るほうめがけて駆け出してきた。

「わ、ちょ、」

「退け！」

先頭の男の人にどん、と突き飛ばされて、背中を壁にぶつける。

「いたっ！」

悲鳴を上げて思わず閉じた眼を開いたときには、もうそこには誰もいなかった。

ばたばたと掛けていく足音が、どんどん遠くなる。

慌てて体勢を戻して、私も彼らの後を追いかけた。

ものすごい勢いで走っているらしく、足音はどんどん遠ざかって、やがて聞こえなくなる。

「うつわ……ひどい……」

駆けても追いつけないと分かって、息を弾ませながら足を止めた私は、そのまま少しだけ深呼吸をした。

かび臭い空気に眉を寄せるけど、息を整えないとどうにもならないから我慢する。

すつ、はあ、と数回の深呼吸の後で、止まっていた足をゆっくりと動かした。

なだらかな坂になっている道を辿っていくと、なぜか道は二つに分かれている。

「……こんな道、あったっけ？」

連れてこられたときに見た覚えが無い道に、私は首を傾げた。耳を澄まして男の人達の足音は聞こえないから、どっちが正しいのかも分からない。

目を凝らせば足跡が見えるかと思ったけど、人が魔物の出入りが激しいらしい洞窟の足元にはコケなんて生えていなくて、それで確認するのは難しかった。

とりあえず、上から下へ来たことだけはわかるんだけど、どっちも上にしか繋がっていないようだ。

道の選択に失敗すると、下手をすれば魔物に出会いかねない。どうしようかな、なんて考えて、うつん、と小さく唸る。

「……驚いたな」

そして後ろから声をかけられて、私はびくりと体を震わせた。こんな場所で声をかけられるなんて、怖い以外の何者でもない。恐る恐ると振り向いて、そこに居る相手を見やる。

驚いた、という言葉の通り目を丸くしているその人は、人間の姿をしていた。

赤くて長い髪がウェーブを描いて肩から零れていて、顔立ちも結構格好いい。

けど、素敵ですなんていえるような状況じゃなかった。

こんな洞窟で遭遇する人が普通の人間なわけが無いし、何よりその人の頬に、私の掌分くらいの範囲で、びっしりと赤いうろこが張り付いている。

明らかに、人間じゃない。

「どうやって檻から出た？」

ゆっくりと近付いてくる相手に、一歩後ずさった。

「ひ……開き、まし、た」

とにかく答えないと何をされるか分からないと思って、私はそう言葉を返した。

私の言葉に、目の前の彼が少しだけ目を細めたのが分かる。背がすごく高い。私より頭二つ以上は上だ。

開いた？　と不思議に呟いてから、彼は首を傾ける。

「あの檻には術が掛けてあった。それを、開いただと？」

問いかけられたって、実際そうなんだから、私には頷くことしか出来ない。

私の顔を見ていたその人は、それからすう、と息を吸い込み、そして口を開いた。

きいん、と耳鳴りがして、私はただ眉を寄せる。

人間の喉から超音波なんて出せるだろうか。

いや出せない。

やっぱり明らかに人間ではない男の人が、数秒を置いて口を閉じる。

それから、ふむ、と頷いた。

「確かに、檻が開いているな。術も消えている。お前が消したのか？」

「そんなこと、してません。押したら、開きました」

首を横に振って答えて、私はもう一步後ろへ下がる。

できれば今すぐ一目散に逃げ出したいんだけど、どっちが正しい道だろうか。

ふむふむ、とまたもや頷いてから、目の前の男の人は私を見て、それから、私の後ろを見た。

「どう思う、ベルティルデ」

「どうもこうも、突然大声出すから何かと思っただらよお」

後ろから落ちた声にびくびくつと肩を跳ねさせて、私は後ろをちらりと窺った。

そこに立っていたのは、先ほどあの檻から女の人を引き摺っていた、私を騙した魔物だった。

いつの間にか私は通路の片方に背中を向けていて、そこから彼が出てきたらしい。

息をつめて体をずらそうとしたところで、近付いてきたベルティルデさんが私の両肩を掴む。魔物らしくその力は強くて、私の体をそこに固定した。

逃げられない状況に、背中がひんやりと冷えていくのが分かる。

怖い。

怖い怖い怖い怖い。

「とりあえず、こいつは魔王様のところへ持っていこうぜえ、アル
フォルトお」

そう言い放った後ろからの声と、そうだなと頷く目の前の魔物に、
それってあのドラゴンっぽい魔物の名前だった気がする、とかそんな
ずれた事しか考えられないくらいには、怖かった。

3 魔王のペットになりました

その場から引き摺られた私は、洞窟の端にあった小さな部屋へと連れて行かれて、その足元に書かれていた光る模様の上に立たされて、気付いたら周囲の様子が変わっていた。

ゲームや物語に良くある、テレポーターションってやつかもしれない。

洞窟だったはずの周囲は石造りの建物に変わっていて、足元には赤い絨毯が広がっている。

「おや、おや、おや、こんな時間にどうしたんだい」

二人の魔物に挟まれたまま歩き出したところで声が落ちてきて、私は視線を上へ上げる。

月を背中ににんまりと笑っていたのは、まるでピエロみたいな男の人だった。

中に浮いているし、何より明らかに右腕が無いのに、右掌だけふわふわと周囲を漂っている。

この人も、人間ではなさそうだ。

「今日はお楽しみじゃなかったのかい？」

「そのつもりだったんだがよお？ こいつ、『封破り』かもしれねえんだよお」

真横からベルティルデさんが言うと、おや、と宙に浮く魔物が声を漏らした。

それからふんわりと体を漂わせて、私の目の前にさかさまになって降りてくる。

白い両頬には赤く涙の形をしたペイントがされていて、茶髪の向こうから、オレンジ色の目が見えた。

「ふーむ、ふむ、ふむ。『封破り』か」

さかさまの顔にしげしげと見つめられて、少しだけ身を振る。魔物だからかも知れないけど、どうして被ってる帽子が落ちないんだろう。

数秒私のことを見つめた魔物が、それから私の前を離れ、ふわりふわりとまた上へ上がっていった。

「それじゃあ魔王様に献上すべきだね。本当に『封破り』なら、魔王様もお喜びになるよ」

「わかってんだよお。サンディeltaはとっとと仕事にいけえ」

しっしっ、とベルティルデさんが手を振って、それを見た魔物、多分『サンディelta』さんがくすりと笑う。

その目が一度だけ私を見てから、すぐにその体が闇に溶けて消えた。

ふん、と鼻を鳴らしたベルティルデさんが歩き出して、私とアルフォルトさんが足を動かす。

逃がさないようにか、アルフォルトさんの手は私の腕を掴んでいて、その爪が紫色をしているのが視界の端に映る。

「……あの」

静か過ぎる廊下を歩きながら、沈黙に耐えられなくなった私はそっと声を掛けた。

「何だ」

それに答えてくれたのは隣の赤毛の魔物で、返事をくれたことに
少しだけほっとしつつ、私は言葉を紡ぐ。

「……『封破り』って、なんですか」

さっきの会話の中で、まったく分からなかった単語を聞いてみる。
私の言葉を聞いたアルフォルトさんが、少しだけ考えてから答え
た。

「めったに居ない、その存在で術を破る人間のことだ」

「術を……」

そうは言われても、あの檻の扉は開いていたんじゃないのか。
眉を寄せた私の前で、先に歩いていたベルティルデさんが振り返
る。

「お前が破ったんだろお？ 俺がせっかく掛けてった術をよお」

「あれは……押したら開いただけなんです、だから、術を破ったん
じゃなくって、」

「あの檻には、人間には触れられない術が掛かっていた」

弁解しようとした私へ言い放ち、アルフォルトさんがちらりとこ
ちらを見る。

「押して開いた時点で、術は解けていたことになる。言っただろう、

『封破り』というのは、『その存在で』術を破る人間のことだ」

きっぱりとした言葉に私は口を閉じた。

それじゃあ、ちよっと押しただけのあの時に、術と言うやつが解けてしまったということだろうか。

今いち、納得がいかない。

もしもそれが勘違いだったとしたら……私はどうなるのだろうか。ゆっくりと足を動かしながら、私は目の前の背中を見た。

先ほど一度こちらを見やっていたベルティルデさんはもう正面へ視線を戻していて、どうでも良さそうに歩いている。

あの女の人は、どうなっただろう。

『ちよーっと齧って、舐めて、啜って、食べつくすだけだあ』

あの台詞からして、無事とは思えない。

同じ目に遭うのかと思うと、体が震えるのを止められなかった。

私の腕を掴んでいるからアルフォルトさんにもそれが伝わったのだろう、私の腕を掴む手に力が込められて、痛い。

それから会話を交わすことも無く、私たちが辿り着いたのは廊下の突き当たりだった。

「失礼します」

ベルティルデさんが扉を叩いた後に、アルフォルトさんが言葉を投げて大きな扉が軋んだ音を立てながら開かれる。

そのまま中へと引き摺られて、私は二人の魔物と共に部屋の中央にあるベッドへと近付いた。

天蓋付きだ。魔王様っていうのはお姫様なんだろうか。

戸惑いながら見つめる私の前で、ベルティルデさんがひよいとベッドを隠すように下げられていた布を捲る。

「ほら、こつちこいよお」

そうして軽く招かれて、更にはアルフォルトさんに押されて、私も魔王が居るらしいベッドへと近付いた。

そうしてそこにあつたものに、目を丸くする。

そこにあつたのは、骨だった。

ただの骨じゃない。骨格標本みたいにしっかりとした骨だ。

その頭蓋骨からは長い髪の外に二本の立派な角が生えていて、明らかに人じゃないのが分かる。

その腕を胸の上で組むようにされていて、両手が大きな剣を一つ抱えていた。

「この剣があ、魔王様を眠らせてるんだあ」

ベルティルデさんが、そう言った。

それからその手が伸びて、魔王の持つ剣に触れようとして、ぱりつと放たれた電撃に遮られる。

「魔王様を眠りに付かせる術と魔王様以外には触れることが出来ない術が、その剣には掛かっている。魔王様が目覚めることが出来るのは、勇者が現れ、王都レリアントにある、その剣と対になる剣を抜いたときだけだ」

言い放たれて、私は佇むアルフォルトさんを見やった。

こちらを見つめる瞳が、私に何をして欲しいのかを訴えている。

視線を外して隣を見やれば、ベルティルデさんもまた、同じような眼をしてこちらを見ていた。

つまりこの二人の魔物は、私に魔王の眠りを解けと言っているのだ。

それがどれほど怖いことなのかなんて、この世界に一年も生きていない私にだって分かる。

魔物というのはあの村を焼くような恐ろしい存在で、魔王はその魔物を統べるものだ。

魔王が善人だったなら、王都の王様だって勇者を待ったりはしていない。

もしも私が本当にその『封破り』だったとしたら、私は大変なことをすることになる。

そう、思った。

けれど。

「さっさとやれえ」

両脇を魔物に挟まれて、拒否できるはずもない。

「……………はい」

どうか弾かれますようにと願いながら、私は手を伸ばした。

けれど願い虚しく、そっと剣へ近付いた指先は、そのまま魔王の抱く剣に触れる。

両脇から息を呑む音を聞きながら、私はそっと慎重に、魔王の抱えるその剣を、その両腕から引き抜いた。

重たいそれを両手で抱えて、それからベッドの上の様子を見る。

びゅう、と風が吹いた。

それは部屋の中の空気を吸い込むようにしてベッドへと流れ込んで、魔王の体へと吸い込まれていく。

それと共に、どう見ても骨格標本だった体が、ゆっくりと変貌していった。

ぼさぼさだった髪に麗しいつやが宿って、その腕にも首にも顔にも肉が付いて。

何だか知らないけど、とてつもなく美形だ。頭から二本、角が生えてるけど。

そして風が止んでから、閉じられていた瞼がぴくりと揺れる。ゆっくりと開かれた瞳は赤く、銀色の睫に縁取られていた。

「……ベルテイルデ……アルフォルト？」

掠れた声が私をここまで連れてきた魔物の名前を呼んで、魔王様、と両方から声が返る。

ぱちぱちと瞬きをしながら起き上がって、魔王は二人を見やつて少しだけ笑い、それから私のほうを見た。

怪訝そうに眉を寄せて、そうしてその唇が言葉を紡ぐ。

「……………なんだ、このおかしな生き物は」

とりあえず、魔王は無礼だった。

+++

私が『封破り』だということは確定してしまった。

もちろんその一番の証拠は、今日の前でがつがつと果物を齧っている、角の生えた魔王様だ。

じゅるりと果汁を嚼るのはちょっと行儀が悪いとも思えるけど、寝てる間何も食べていなかったんなら仕方ない。白骨化するほどの間って、一体どれくらいの時間だったんだろうか。

「さあ、さあ、さあ、魔王様、ナプキンをどうぞ」

「ん」

果物を食べ終えて口も手もべたべたな魔王に、さっきここへ来たときに会った魔物が布ナプキンを差し出す。

それを受け取ってから口を拭いた魔王が、それから両手を拭いて、改めてこちらを見た。

「で、それが私の剣を取ったのか」

「はい」

問いかけられて、アルフォルトさんが答える。

それ、で指差されてしまった私は、さっき魔王から取った剣を抱いたままだ。

銀髪で美形で赤い目な魔王が、私をしげしげと見つめて、ふん、と鼻を鳴らす。

「こんなみょうちきりんな生き物が『封破り』だったとはな」

ゆつくりとベッドから立ち上がって、魔王が私の方へと近付いてくる。

下がらされた場所は壁際だったからそれ以上逃げることが出来ずに、私はただ目の前の魔物の王様を見上げることしか出来なかった。

「人間、それを寄越せ」

「あ、はい」

間近まで寄ってきたところでそう言われて、慌てて抱えていた大きな剣を差し出す。

魔王が私からそれをひょいと奪い取って、それから刃をじっと眺めた。

綺麗な輝きを持つ剣は柄が金作りで、魔王の目に似た真つ赤な宝石が刀身から柄まで付いている。

そんな豪華つばいものを持っても負けて見えないのは、やっぱり魔王が美形だからだろうか。

ぼんやりとそんなことを考えて、それからいやいや、と胸のうちだけで首を横に振る。

そんなことを考えている場合じゃない。

とりあえず、恩を返すような感じで、私をあの村に返してはくれないだろうか。

ここに居たら、確実に私は魔物に食べられてしまう。

それだけはいやだ。

「ふむ」

じつと剣を見つめていた魔王が、そう声を漏らしてから、ぶんと剣を上下に振った。

びくつと体を震わせたけど、剣は私の体に到達することなく、その切っ先が私の鼻先で止められる。

後少しでも突き出されたら、まずは鼻に怪我をしそうだ。

「人間、お前の名前は？」

人に剣を突きつけたまま、魔王が聞いた。

この状況で黙秘権を行使したら、ぷすつとやられることは目に見える。

「み、みつ、です。みつ、日暮」

英語圏っぽい感じで答えながら、私は目の前の魔王へ視線を戻した。

ミツ、と私の名前を呼んだ魔王が、剣を少しだけ引いた。赤い瞳がこつちを見ていて、かなり怖い。

「『従僕せよ、ミツ・ヒグラシ』」

「え？」

そして突然歌うように言われて、私は目を瞬かせた。部屋の中に、しん、と静けさが過ぎる。

十数秒を置いて、魔王様あ？ とベルティルデが声を漏らした。それを無視した魔王が、なるほど、と声を漏らしてから、剣を持つていないほうの手をこちらへ伸ばしてくる。

腕を掴まれて立たされて、私はぱちぱちと目を瞬かせた。

「『封破り』というのは術も効かなかったか」

「いえ、いえ、いえ。『封破り』は術を解くだけ。おかしいこともあるものですねえ」

魔王の呟きに答えた魔物が、ちよつと興味深そうにこつちを見てくる。

そんな視線はいらないよと目を逸らしながら、私は彼らの言葉の意味を考えていた。

術が効かない、というのはどういうことだろう。

今、私は何か術を掛けられたんだろうか。

「こいつは妙な生き物だが、面白いな。おい、ベルティルデ、アルフォルト」

「はい」

「はい」

名前を呼ばれて居住まいを正した二人が視界の端に過ぎつて、ちらりと見やると、私の腕を掴む魔王に、そのままその視線が向けられていた。

それを追いかけて、私も魔王を見上げる。

魔王は私を気にした様子も無く、片手に剣を持って片手に私を捕まえたまま、にやり、と笑った。

「これは俺が貰っておこう」

「どうぞお。もともと魔王様にお渡しするものでしたからあ」

「お喜び頂けたなら光栄至極」

どうやら人身取引をされてしまったらしい。

にやりと笑ったままの魔王の視線が、こちらへと向けられる。

「よし、ミツ。今日からお前は、俺のペットだ」

逃げられると思うなよ、と囁かれて、目の前が真っ暗になった気がした。

4 魔王は結構乱暴です

異世界に来て一年未満で、私は魔王のペットになった。

ぎゅうつと拳を握ってから、小さく溜息を吐く。

魔王が私に入っていると云ったのは、宙に吊り上げられた鳥籠みたいな檻の中だった。

鳥籠、とは言っても、結構広い。6畳くらいだろうか。丸いからよく分らない。

隅っこには魔王が寝ていたベッドに似た天蓋つきのベッドがあるし、それとは逆側の端っこには衝立がある。

そこには簡易トイレみたいな奴があつて、粗相するならここでしろ、なんて賤みたいなことまで言われた。

檻はきちんと閉じられて、今度はしっかり鍵も掛けられている。

そして何より檻自体が空中に吊り上げられていて、万が一扉が開いてもそこに近づく勇氣を持つことは出来そうにない。

「……なんでこんなことに……」

鉄製の床の上に敷かれたふかふかの絨毯へ座り込みつつ、小さく呟く。

これから、私はどうなるんだろうか。

「おや、おや、おや。元気がないね」

そこへ声が掛けられて、私は顔を上げた。

籠の向こうからこちらを見ていたのはオレンジの目をした宙に浮かぶ魔物で、やっぱりどう見てもピエロに見える格好をしたそいつが、ふわふわと漂う右掌で頬杖を付いたような格好をしたまま浮いている。

「えつと……」

この魔物は何て名前だったろう、と思って見つめると、サンディルタだよ、と私の疑問に答えるように魔物が言った。

「サンディルタ、さん」

「丁寧な人間だね、呼び捨てたっていいのに」

くすりと笑われて、いいやそれは無理です、と心のうちだけで反論する。そんなことをして、気を悪くしたら私の末路はイコール彼らの胃の中だ。

ぎゅっと拳を握ったままで、さっき誰にも向けられなかった問いかけを、目の前の相手へと零す。

「その……私は、家に返してもらえるんでしょうか」

返答次第では、ここから飛び降りることを考えなくてはいけない気がする。

じっと目を見つめて訊ねた私に、そうだねえ、とサンディルタさんが呟いた。

「魔王様がお前に飽きて、気まぐれを起こさなければお返しくさるかもね」

「気まぐれを……起こさなければ？」

「魔王様は人間をあまりお食べにならないから」

それは意外だ。

目を丸くする私の前で、にんまりとサンディルタさんが笑う。

「まあ、まあ、まあ。それでも、たまには珍味を食べたい気分だつてあるからね」

「……………」

それはつまり、私を食べてみたいと思ってしまったら終わりということだろうか。

何だか絶望的な気分になって、私はずるずるとサンディルタさんが居るのは逆側へ移動した。

丸い籠の端まで行けば、必ず檻の格子が背に当たる。

そこで振り返って、檻を掴み、じつと真下を見下ろす。

かなり高い。

落ちたら、怪我しちゃったじゃすまない高さだ。下手をすれば死んでしまうと思う。

そう思いながら、それでも真下を見つめていた私の上に、ふわりと影が落ちた。

見やれば、向こう側から檻を迂回してきたらしいサンディルタさんが、オレンジ色の目で私を見つめていて。

「まあ、まあ、まあ。大人しくしておいで。魔王様のご不興を買わなけりや、それなりに可愛がってくださるよ」

格子から入り込んだ手に頭を撫でられても、ぜんぜん嬉しくなかった。

+++

私が入っている籠が吊られているのは大きな塔の中で、どうやら窓が近くにあったらしい。

瞼を光が差すような眩さに、私はゆっくりと目を開いた。

「……ん……」

どうやら、あれから眠ってしまったらしい。

やわらかな絨毯の上で体を起こして、ごしごしと目を擦る。

ふわーとあくびをして、それから伸びをしてから、きょろりと檻の中を見回した。

「……えっ!？」

そして、そこにあつた人影に、びっくりと体を震わせる。

何故か、私の隣に魔王が転がっていた。

朝日を銀髪が弾いて、きらきらしていても綺麗だが、そういう問題じゃない。

何をしているのだろっ、この魔物は。

じつとその顔を見つめて、目を覚まさないことを確認してから、そろりとその側を離れる。

白骨化するほど眠ってたくせに、何でまた人の隣で寝ていたんだろっか。

首を傾げつつそんなことを考えた私は、それからふと魔王の手を見て、少しだけ眉を寄せた。

その手には、鞘に収めた剣があつた。

刀身は見えないが、その黄金色の柄は、どう見ても私が昨晚魔王

の上から取り去った剣だ。

もしかして、と思いながら、そっと手を伸ばして、剣に触れる。そのままくいつと引つ張ると、魔王の手は簡単にそれを手放した。それと同時に魔王の体が揺れて、驚き見やれば、ゆっくりと魔王が眼を開ける。

「……………眩しい」

いらだたしげに呟いてから、魔王の目が私を見る。

寝起きのぼんやりとした視線が私の顔を撫でて、それから私の手にある剣へ向けられ、そして両手で隠された。

「……………油断した」

「あの」

「それは置いておけ」

問いかける前に命令されて、素直に剣を絨毯の上に転がす。起き上がった魔王がそのまま立ち上がり、軽く首を横に振った。それからその目がこちらを見て、にやり、とその口元に笑みを浮かべる。

「よく出来たな、ミツ」

優しく囁いて、伸ばされた手が私の頭を撫でる。

もしかして、やっぱり、この剣の『眠る』術とやらに掛かっているのだろうか。

今までそれで眠らされていたくせに、どうして学習しないんだろうと、私は呆れた顔になる。

にやりと笑った魔王が身をかがめてきて、その両手が私の両わきに触れた。

「あ、あの……？」

「立て」

言いながらぐいん、と持ち上げられて、そのまま立つことを強制される。

戸惑いながら、私は自分よりかなり大きい魔王を見上げた。

アルフォルトさんも大きかったけど、魔王は更に大きい。

いくら私が小さいほうだとは言っても、これは酷い差だ。いろいろと不公平だ。

そんなことを考えながら魔王を見上げると、魔王の手が私の頭に触れる。

くいつと髪の毛を引っ張られて、私は身じろぐことなく、何がしたいのかと魔王の動きを見守った。

数回人の髪をくいくいと引っ張った魔王が、ふむ、と呟いてから、私の体に掌を戻す。

そのまま荷物のようにひょいと腰へ抱えられて、私は目を丸くした。

「あの？」

「ペットの面倒を見るのは飼い主の務めだからな。行くぞ」

そう言葉を置いて、魔王が檻の中を歩き、鍵の掛かっていた扉を開く。

そのままひょいと外へ出て、まるで宙に足場があるように歩き出した。

一歩進むたびにぐらぐら揺られながら、体を下向きにされたままの私は、目の前の光景にひいと声を漏らす。

明るいから、床までの距離がよく見える。

高い。かなり高い。

もしも魔王がここで手を離したら、私は下へと一目散だ。

思わず、両手で腰を抱える魔王の腕を掴む。

頼れるのがこの腕しかないなんて、とてつもなく不幸じゃないだろうか。

「ミツ？」

魔王が名前を呼ぶけど、それに答えている暇なんてない。

ぎゅうつと魔王の腕を掴んだままの私がそこを手放したのは、目の前に広がる足場がとても近くなっただけだった。

もう私が歩ける高さだというのに、魔王は未だ私のことを手放さない。

そのほうが速く移動できるからだろうか。

それにしても、今度はおなかが痛い。

どこまで行くんだろつかと、魔王に小脇に抱えられたままで周囲を見回してみる。

一番奥には私が居た籠のつられている塔の入り口があつて、私と魔王はそこから伸びる廊下を移動中だった。

行き先が見たいけど、頭が後ろ側にある以上、何も見えない。

うつんと悩んだところで、ぴたりと魔王の動きが止まる。

どうしたのかと思っていれば、ぽい、と抱えられたとき以上の唐突さで手放されて、私は床へべしやりと落ちた。

「なんだ、どんくさいな」

私を見下ろした魔王が言うのを聞きながら、そっと起き上がって

体に付いた汚れを払う。

せっかくティアルダさんに貰った服なのに、汚れては困る。ちらりと魔王を見上げると、赤い瞳が何だかとても楽しそうに細められていた。

そしてその手ががしりと私の頭を捕まえて、そのままぐいぐいと引っ張られる。

「こつちだ」

「あ、あの、わ、ちょ、」

その連れて行き方はどうだ、と問いかける前に、転びそうになって慌てた私は魔王を追いかけた。

そのまま連れて行かれたのは通路脇にあった一室で、中へと入ってすぐにあった物に、私は目を丸くする。

そこにあったのは、お風呂だった。

ティアルダさんの家で入らせてもらったのと同じだ。

湯気の立つ水がなみなみと入った大きな湯船に、桶が一つに脱衣場所があるとなれば、明らかにお風呂だ。

魔物ってお風呂に入るのか、と思ったところで、びりつと嫌な音が肩口からする。

それに気付いて視線を動かした私は、服で覆われていたはずの肩が露になっていることに気が付いて眼を見開いた。

「……え？」

「やっぱり、人間の服はもろいな」

魔王の声が落ちてきて、そのまま視線を向ける。

魔王の手には布切れがあつて、その柄はどう見ても私が着ている

ものと同じで。

「……ま、魔王様」

そつと呼びかけると、なんだ？ と答えた魔王がこちらを見た。
赤い瞳はとても楽しげで、いいやそういう場合じゃない。

「その……何をなさってるんですか」

「ペットを湯浴みさせるのも飼い主の務めだ」

問いかけている間にも魔王の手が伸びてきて、びり、びり、と服が破かれる。

慌てて両手で体を抱え、私は少しだけ魔王から離れた。

「け、けけ、結構です！」

「何を言うか、その髪のもつれ具合をしてみる。俺のペットになったんだ、身汚いのは許さん」

せつかく距離を取って訴えたというのに、鼻を鳴らした魔王には効果が無いらしい。

どうしろっていうのかと、私は頭がくらくらするのを感じた。

このままだと、確実に裸に剥かれる。

魔王にその気が無いとしても、多分男だろう魔王の前で裸になるなんていやだ。

日本人はそれなりに恥らう文化を持っているのだ。

「じ……自分で！」

だからこそ、私は魔王を見上げて訴えた。

「自分で入ります！　自分で入ってちゃんと綺麗にします！」

私の言葉を聞いた魔王は、少しだけ面白くなさそうな顔をした。

++

「長くは待たん」

どうにか魔王が引き下がってくれて、扉の外へと出てしまっただけで、私は大急ぎでお風呂に入った。

もし汚かったらやり直すとまで言われたから、必死になって髪を洗う。

この世界にはシャンプーやリンスやコンディショナーなんてないから、石鹸で洗っただけだ。

それからじゃばじゃばと丁寧に石鹸をお湯で落として、石鹸を泡立てたタオルで体を擦って顔も擦って、その後きちんと泡を流して、そして脱衣場所へと素早く移動した。

今、何分くらい経っただろう。

とにかく、外で待ってるだろう魔王が踏み込んでくる前に、体を拭いて着替えをしなくてはならない。

籠が二つあって、そのうちの一つに入っていたタオルを取って、自分の体を手早く拭いた。

それから髪を丁寧に丁寧に拭いて、ちらりと先ほど破かれてしまった服を見る。

「ティアルダさん……」

せつかく貰ったものだったのに、上着はもはや見るも無残な姿だった。

これじゃあ、もう着ることはできないだろう。

はあと溜息を吐きながら、着替えらしい服を手取る。

男の人のボクサーパンツみたいな下着が、この世界での女性の普通の下着らしい。

それを用意した魔王に驚くべきか、誰が持って来たのかと聞くべきなのかも知れないが、気にしたら穿けなくなりそうなので、必死になって自分の中の疑問を追いつ出す。

この世界にはブラが無いので、タンクトップも着込めば、下着を着込むのは終わりで。

それから今度は服を掴んで、広げてから肩を寄せた。

「……………これ、着るの？」

それは、どう見てもドレスだった。

ティアルダさんが着てるのだって見たことが無い、ふりふりしてふんわりしたものだ。

どうしてこんなものを着なくてはいけないのかと思いつながら、裾を濡らさないように下から被って、ぐいっと引き降ろす。

似合うかどうかは分からないけど、着るものはこれしかないのだから仕方ない。

それから長い袖に腕を通して、そのまま着ようとしてから、はたと気が付いた。

「……………背中が」

服の留め具は後ろについているから、手が届かない。
むっと眉を寄せつつどうにか留めようとしてみるけど、無理だった。

五分くらいの格闘の後で、溜息をこぼしてから、そっと扉に触れる。

戸を開くと、そこには待っていたらしい魔王が居た。

「遅いぞ。ちゃんと綺麗にしただろうな？」

問いかけてくる声に頷いてから、お願いがありまして、と言葉を零しつつ、彼へ向かって背中を向けた。

「留めて貰えませんか？」

ブラは付けてないけど上着を着ているから、日本人的にはそんなに恥ずかしくない。

どちらかと言えば、仮装衣装を着込んでる感覚だ。

私の言葉を聞いた魔王が、少しだけ黙ってから溜息を吐いて、その手をこちらへと伸ばしてくる。

「……お前は、やっぱり妙な生き物だな」

なんでまたもそんな失礼なことを言われたのかは、よく分からなかった。

5 ペットは枕ではありません

ひらひらした服を着せられた私は、そのまままたも魔王に小わきに抱えられて、とある部屋へと連れてこられた。

そこは壁際すべてに本棚が並べられた円形の一部屋で、私が居た檻の吊られていた塔と同じか、それ以上の高さ天井がある。

「今日はこれにするか」

私を抱えたままで本棚から本を選んだ魔王が、それを持ったままで部屋の中央に移動した。

部屋の中央には丸くて大きなクッションみたいなものがあって、その上にぽんと放られて落ちる。

柔らかかったから痛くはなかったけど、明らかに荷物扱いだ。

ちよつと抗議べきなんだろうかと視線を向ければ、魔王もクッションの上に座ったところだった。

魔王が座っても大きく見えるんだから、このクッションっぽい物体の大きさはかなりのものだ。

「……魔王様？」

それにしてもどうしてこんなところまでつれてきたのだろうか、と思つて名前を呼ぶと、本を開いた魔王がちらりとこちらを見た。その赤い瞳が、光の加減でゆらりと揺れて見える。

「この部屋から出ない限り、お前の好きにしている」

そう言い放つて、魔王の視線は本へと向けられた。

読書をするんなら、私を連れてくる必要はなかったのではないだ

ろうか。

少しだけそんなことを考えて、私は眉を寄せた。けれど、ベッドとトイレと絨毯以外には何も無いあの檻へ戻して欲しいわけではなかったから、分かりました、とだけ頷いてから本棚の方へと近付く。

本は、とてもたくさんあった。

図書館みたいな、紙のにおいがする。

本の一つに手を伸ばして、ぱらりと中を捲った。

しかし、そこにあっただのは私には理解できない文字の群れで、少しだけ眉を寄せてからそれを閉じる。

単語をどうにか少し覚えることしか出来なかった私には、この本は読むことが出来ない。

せめて絵が付いてる本はないだろうか、と考えながら、本を開いては戻す作業を繰り返しつつ、部屋をぐるりと回っていく。

そうしていくつも本を見ては戻して言った私は、ふと目の前の本棚の高い場所に、ぴよこんと飛び出ている本があることに気が付いた。

背表紙がこちらを向いていないから、それがどんな本かは分からない。いや、向いていたとしても読めるとは思わないけど。

少し飛び出しているその様子に、ちょっと中身を見てみたい気になって手を伸ばす。

けれど、この本棚は魔王に合わせて作られたらしく、上段にあるその本には指先も触れられない。

ならば踏み台などはないかと、私は室内を見回した。

けれど、魔王なら届くのだろうから、もちろん部屋の中に踏み台らしきものは見当たらない。

強いて言うなら部屋の中央のあのクッションだけど、現在魔王が使用中だ。

ならばどうするか。

少し考えてから、私は目の前の本棚からごっそりと本を抜いた。

ぱたりと倒れるそれは放っておいて、手が届く範囲の本を抜いて、本棚に足場を作る。

与えられていた靴を脱いで、そつと本棚に足を乗せた。

「ん……っ」

上の本棚に捕まりながら、上へ上へと移動してみる。

本を抜いた棚の一番上までくると、どうにかぴよこんと飛び出した本へ手が届きそうな高さに移動することが出来た。

勝利を確信して、私は本へと手を伸ばす。

それと同時に、ぐら、と本棚が揺れた。

「え」

声を漏らしたところで、どうにもならない。

私が捕まったままの本棚が、ゆっくりと傾いていく。

このままでは本棚の下敷きだ。

ひんやりと背中が冷えたけど、今本棚から離れてもどうにもならないだろうことは分かったから、私はぎゅっと眼を閉じて、そのまま歯を食いしばった。

「……何をしている」

呆れたような声が掛けられて、本棚の動きが止まる。

斜めに本棚に捕まっていた私の背中にも何かが触れていて、恐る恐る目を開いた私は、それから声の主を見やった。

ついさっきまでクッションに座って読書に勤しんでいたはずの魔王が、どうしてか私の後ろに立っていた。

その片手は本棚をぐいと押しやって元に戻っていて、それからその片手が私を本棚から引き剥がす。

「……すみません」

本棚を倒すところだったのでそう謝ると、魔王が溜息を吐いた。その目が私の持っている本を見て、少しだけ眇められる。

「それが読みたかったのか？」

「あ、や、その……」

どんな本か気になっただけ、なんてちょっと言えない。

問いかけに曖昧な声を漏らした私を見下ろしてから、魔王の手が私から本を取った。

「さっさと他の本を片付けろ」

「あ、はい」

言われて、私は慌てて屈み込んだ。

どれがどの段かは覚えていいるから、ちゃんと元通りに本棚へと押し込んでいく。

もしかしたら並びはばらばらかもしれないけど、魔王は何も言わないから大丈夫だろう、ということにした。

そうして全部を片付け終えた私の頭に魔王の手が触れて、そのままずい、っと引っ張り歩き出す。

「わ、わ、わわ、わ！」

お風呂に連れて行かれたときと同様に、転びそうになった私は慌てて魔王の後を追いかけた。

辿り着いたのは先ほどのクッションで、魔王がどかりとそこへ座り、私をクッションへ引き倒した。

「うぷっ」

思い切り顔から倒れてしまつて、間抜けな声が口から漏れる。けれど魔王には気にした様子もなく、顔を上げた私の前に、ぽいと先ほどの本が放られた。

「お前はもう、そこで大人しくしている」

言い放ちながら、魔王の手がクッションの上に落ちていた大きな本を拾い上げ、さっき私が離れるときと同じように、その本を開く。うろつろした結果本棚を倒しかけたことは事実なので、私は魔王の言葉通り、大人しくそこに座り直した。

渡された本を手にとって、じつと表紙を見つめる。

やっぱり、なんと書いてあるかは分からない。

よく分からない本を眺め続けなくちゃいけないのは苦痛だけど、自業自得だ。

せめて絵が描いてあるといいな、と思いながらぱらりと本を開く。そして、そこにあつた文字に、私は目を見開いた。

『目次』

そこにあつたのは、ただの目次だった。

多分この本は短編集で、だからこそ必要なページだ。けれど問題はそこではなくて。

目次だ、と私が終わったことが問題だった。字が読めるのだ。

「これ……」

そこにあっただのは、どう見ても日本語だった。
懐かしすぎるそれに泣きそうになって、慌てて本を閉じる。

すつ、はあ、と深呼吸をしながらちらりと見やると、魔王はすでに私など眼中に無い様子で読書にいそしんでいた。

それを確認してから、ばくばくと跳ねている心臓を落ち着けて、もう一度本を開く。

見覚えのある童話の名前が並んでいる目次のページを、じっと見つめる。

懐かしすぎるそれが、胸を痛くするくらいに嬉しかった。

+++

本の中身は、童話集だった。

アヒルの子から人魚姫、果ては桃太郎の話まである辺り、国柄は関係ないらしい。

それでもとにかく、日本語を見ることが出来たのが嬉しくて、ページを捲りながら私の目は潤みっぱなしだった。

「……おい」

ぐす、と鼻を噉ってから本の中ほどまで来たとき、声と共に影が落ちてくる。

顔を上げれば、少し離れて座り読書をしていたはずの魔王が、私の方へと近付いてきていた。

赤い目がこちらを見下ろしていて、どうしたのかと思っていれば、その手が私の顔へと伸びてくる。

がしりと右側を掴まれて、親指がごしごしと私の右目の辺りを擦った。

思わず目を閉じたのだが、遅かったらその長い爪が眼球に当たっていたんじゃないかと、瞼に感じるちくんとした感触に思う。

とりあえず抵抗せずにその攻撃を受けていると、指の動きを止めた魔王が私の手元の本を覗きこんだ。

「……そんなに泣ける話なのか？」

訊ねながら、私が持っている本がひよいと奪われる。

「あ……」

思わず追いつがるように手を伸ばした私の前で、少しでも高い位置に本を持ち上げて中身を見た魔王が、その眉間の間に皺を寄せた。それはそうだ。ただの童話を読んで泣いているなんて、おかしいにも程があるだろう。

なんて答えようか、と考えをめぐらせようとしたその時に、本を見ていた魔王の視線がこちらへ向けられる。

「……お前は、これが読めるのか？」

「え？」

「読めるのか、と聞いている」

淡々とした問いかけだった。

はい、とそれに対して頷けば、角を二本生やした魔物である魔王が、そうか、とよく分からない表情で呟く。

その手が、未だ本を取り返したくて伸ばされていた私の手へと本

を押し付け、ずっと人の顔を掴んでいた左手がようやく離れて、右目をあけることが出来るようになった。

「読んでみる」

言い放ち、魔王がふんとクッションに倒れ込む。

腕を腹の辺りで組んだ魔王の言葉に、私はぱちりと瞬きをした。けれど、どうして、と訊ねる前に魔王がじろりとこっちを見たので、慌てて本を捲る。

「ご不興を買わなけりや、と言っていた、サンディルタさんの言葉を思い出した。」

最初のページは、みにくいアヒルの子の話だった。

それから、人魚姫に白雪姫、シンデレラを読んで、さるかに合戦や浦島太郎。

魔王は角が生えているので、鬼が出る話は必死に避けた。あんまりにも必死だったので、日本語の懐かしさに浸る余裕もない。

魔王は眼を閉じているから、私が余分にページを捲ったことに気付いた様子は無った。

「……えっと、おわり……です」

そうして最後のページまで捲ってから、彼へ向かって言葉を零す。奥付らしいページには見たことの無い文字が並んでいて、それから目を逸らすように本を閉じた。

私の言葉を聞いた魔王が、ゆっくりと目を開いて、その視線をこちらへ向ける。

「……何処が泣けたんだ？」

とても不思議そうな声だった。

え、と声を漏らした私の前で起き上がって、魔王の手がまたも私から日本語で書かれた本を奪う。

「あ、あの……」

「ふん」

そのままぱいと放られて、私は思わず本の行方を見送った。

クツシヨンが無い場所へ落ちた本は、ずるずるとその場で回転しながら少し滑っていつて、クツシヨンと本棚の中間辺りでその動きを止める。

あんな風に乱暴に扱うくらいなら、あれを私にukれないだろうか。そう思って見つめた私の顔を、がし、と何かが掴む。

何かというのはもちろん魔王の手で、ぐいと引つ張られて顔をそちらへ向けさせられて、私は正面から覗き込んでくる魔王の顔をじつと見上げる形になった。

赤い瞳は炎のように光を弾いていて、燃え滾るような色合いを銀色の睫が縁取っている。

髪も眉毛も銀色一色で、その頭からは立派な角が一对生えている。角の形はまっすぐじゃなくて、波打つような形をした太いものだ。かなりの美形に見えるんだけど、見つめられてもときめくんじゃなくて、食べられるんじゃないかというような恐怖を感じて、心臓がばくばくと揺れる。

私の目に怯えを見つけたのか、魔王が少しだけその目を細めた。

「俺が怖いかな」

低い声が、そう訊ねてくる。

それを受けて、私はこくこくと思いきり頷いた。

魔物を統べる魔王が、怖くないはずが無い。

目の前のこの魔物は、私の命を握っているも同然なのだ。

私の答えを見た魔王は、ふん、と鼻を鳴らしてから、私の顔を掴んでいた手を滑らせて、そのまますりりと人の首元まで辿っていくくつと掴まれて、私の首はその掌に収まってしまった。

どく、どく、どく、と心臓が波打つのを耳の奥に聞きながら、私は目の前の魔王の様子をじっと見つめる。

私の顔を見ていた魔王は、それからゆっくりと口元に笑みを浮かべて、そのまま私の体をクッションに押し付けた。

「わっ」

ぼすんと倒れこまされて、驚いた声を上げたところで、首に触れていた手が離れる。

驚き起き上がろうとしたところで、何か重たいものが腹部に落ちてきた。

「ぐふっ」

思わず変な声を漏らしてしまってから、私は恐る恐るそこを見る。倒れさせた私の腹部に、仰向けになつた魔王の頭が乗っていた。角が宙へ向かって突き出されている。

「……ま、魔王、様？」

そつと呼びかけるけれど、魔王は気にした様子もなく、その手で自分が読んでいた本を持ち上げて、仰向けのままではらりと捲る。

「静かにしている」

どうやら人のことを枕にしようと考えたらしい魔王の下で、私は胸のうちでだけ溜息を吐いた。

しかし、まさか重いとその頭を放り出すわけにもいかない。そんなことをしたら、今度こそ食べられてしまうかもしれない。

仕方なく体の力を抜いて、真上を見上げる。

高い高い天井があつて、明り取り用の窓が壁上部の両端にあり、そこから入り込んだ明るさがここまでを照らしている。

早く私に飽きて、食べようとは思わずに逃がしてくれないだろうか。

そんなことを考えながら、私は魔王が本を一冊読み終えるまで、その枕にされ続けたのだった。

6 魔王は意外と平和主義でした

ペットである私の食事は、魔王が食べていたのと同じ果物だった。丸ごと渡されたそれを、服を汚さないように注意しながら食べるのはかなり大変だった。

こんなにも汁気の多い果物は、できれば切ってから寄越して欲しい。

そう思いつつも、まさか魔王に切ってなんていえないので、与えられるままにそれを食べる。

同じものを食べた魔王が自分の口と手をナプキンで拭って、そのまま私の口元と手も拭いた。

今は魔王が座る椅子の側に座らされて、ちょっとお尻が冷たい。

この建物は、どうやら城のようなものであるらしい、と私はようやく気付いた。

今いるここは、さしずめ謁見の間と言うやつだろうか。

魔王が座っているのは玉座らしい大きな椅子だけど、まるごと石造りだ。これもまた、腰に悪そうだなと思う。

「魔王様」

呼びかけがあつてちらりと声がしたほうを見やると、そこに立っていたのは見たことの無い魔物だった。

半漁人、と呼んだほうがいいんだろうか、そういう見た目をしている。

「どうしたサーティスト」

魔王がそう呼びかけると、サーティストさんというらしいその半漁人が膝を付く。

「お目覚めになったと聞き、こうして馳せ参じた次第です。我が群れは補充を終了致しました。勇者を打ち倒すべく、進軍する許可を頂きたく存じます」

「勇者はまだ来ていない」

「……………何ですと？」

頬杖を付いた魔王の台詞に、サーティストさんが驚いたように声を漏らす。

魔王の手が伸びてきて、椅子の側に座らせたままの私の頭を掴んだ。

「『封破り』を手に入れた。こいつが、俺を目覚めさせた」

「『封破り』、ですか…………？」

少し疑わしげな顔をして、サーティストさんがこっちを見る。

なんだろうとその目を見返しながら、私は魔王にされるがままだった。

ここで魔王に逆らってもどうにもならない。

下手をすれば、無礼だと叫んだサーティストさんの、あの手に持っている槍で刺されそうだ。

絶対痛いだろうなあと身を竦めたところで、サーティストさんが私から目を逸らし、魔王を見つめた。

「……では、勇者が現れる前に、王都への進軍を？」

「そうなるな。だが、ただ進軍しても面白くない。武装していない王都に攻め込んだところで、圧勝は目に見えている」

あっさりとした言葉に、ああやっぱり私はどうしようもないことをしちゃったんだな、と思う。

きつと、今まで魔物が王都へ攻め込まなかったのは、勇者が現れないと魔王が目覚まさなかったからだ。

なのに私がその術を解くことができてしまったから、もう、魔物達には勇者を待つ必要が無い。

私が、この世界の人間を滅ぼした引き金になってしまっただろうか。

異世界から来ただけの、ただの人間なのに。

自分で着たドレスを見つめて、ぎゅつと膝の上で拳を握った。

魔王が私の頭から手を離し、そうだな、と言葉を零す。

「とりあえず、軍備が整っているのなら、王都近くの村を一つ廃村にしる。俺が復活したことを伝える為にな。人間は殺さないほうが、数多く伝わるだろう」

「それでは、王都が武装を始めてしまいますが」

「そこを叩くのが面白い。それに、王は『勇者が現れば魔王が復活する』と知っているからな。俺が復活したことを知れば、王はいもしない勇者を血眼になって探すだろう。滑稽だとは思わんか？」

面白いだろうと言いたげな魔王の提案に、は、と声を漏らしたサーティストさんが頭を下げたのが、視界の端に映った。

「その後は、俺が命じるまで王都の様子を監視している」

魔王がそう命令すると、仰せのままに、と言葉を落としたサーテ
イストさんが、そのまま颯爽と去っていく。

大きな尻尾まであったその背中を見送って、私は小さく息を吐い
た。

「どうかしたか、ミツ」

声を落とされて顔を上げると、玉座に座った魔王が私を見下ろし
ていた。

灯りを赤い瞳がてらりと反射していて、その角や髪にも橙の光が
落ちている。

「……人間を、滅ぼすのですか」

私は魔王を見つめた。

私を前にした魔王が、どうするかな、と声を漏らす。

「ある程度、俺達と同じ目に遭わせてから、遠くの大陸にでも追い
払ってやるうとは思っているが」

追い払う、と言う言葉に、私は目を丸くした。

「遠くの大陸、ですか」

「そうだ」

私の問いに答えて、魔王の視線が私から外れる。

「もともと、レニア大陸は魔物の大陸だ。俺達しかここにはいなかった。それを、増えすぎた人間共が自分たちの生きる場所を探すために侵略してきた」

何かを思い出すように、その目が鋭く眇められた。

「ご大層なことに勇者と呼ばれる人間を召喚して、更には俺の剣に術まで掛けた」

寄越された言葉に、私はぱちりと瞬きをする。

言葉もなく見上げた先で、ふん、と鼻を鳴らした魔王が、その指をぱちんと弾く。

それを受けて、その指先から数センチ浮き上がったところに、突然紫色の炎が現れた。

何も糧などないはずなのに、それはぼうぼうと燃えて、ゆらゆらと揺れる。

「もはや千年も前の話だ。人間達は誰も覚えていないだろう。……だが、俺達はそれを覚えている」

人ではない証拠のように言い放つ、魔王の声は淡々としていた。

「だからこそ、相応の仕返しをして蹴散らすだけだ」

ふう、と息を吹きかけて、魔王はその指先の炎を消した。

それは、つまり、追い出せれば人間を滅ぼしたりはしない、ということだろうか。

煙一つ残さず消えてしまった炎があつた場所を見つめながら、私は言葉を見つけることが出来ずに、ただ、そうですか、とだけ呟い

た。

7 最初からそうしてください

夜も遅くなつて、私は籠の中へと戻された。

「これは置いていくから、お前が預かっておけ。俺以外には触らせるな。分かったな？」

言い放つて魔王が差し出したのは、私が朝、絨毯に放置していた剣で、はい、と頷きながらそれを受け取る。

でも、この剣は魔王にしか触れない術が掛かっているんじゃないか、と首を傾げると、私の疑問を感じ取ったかのように魔王が目を細めた。

「お前は『封破り』だ。お前が手渡せば、それはどんな奴にだって触ることが出来る」

だから誰にも触らせるな、と囁く声が低かったので、慌ててこくこくと頷いた。

私の様子を見て満足げに鼻を鳴らした魔王が、私を置いて檻から出て、そのまま檻の戸を閉じる。

かちやりと鍵まで掛けて、去っていく魔王を見送ってから、私はとりあえず剣を隠しておくことにした。

朝は放置してしまっただけ、どうやら大事なもののようだし、人目に付かないほうがいいだろう。居るのはみんな魔物だけど。

きょろりと周囲を見回して、檻の中に唯一ある家具であるベッドへ近付く。

いくらなんでもベッドの上には隠せないので、一度剣を置いてから、ずりずりとベッドを中央へ向けて引き寄せた。

端との距離がそれなりに開いたのを確認してから、剣を持ってベッドの向こう側へ移動する。

格子に背中を向けて、ベッドの側に屈み込み、私は剣を絨毯と籠の底の間に押し込んだ。

かりかり、と少しだけ鉄を削る音がしたけど、まあ気にせず絨毯でしっかり隠す。

それからベッドの向こう側へと戻り、ベッドを元通りにすれば終わりだ。

「……よし」

きちんと隠せたことに息を吐いてから、私はそのまま絨毯の上に座り込んだ。

体を覆っているのはふわふわしたドレスだからか、しっかりと膝までを隠してくれる。

ちらりと見上げれば、窓の外には月が見えた。

「……ティアルダさん、どうしてるかな……」

小さく呟いて、優しくったあの人を思い浮かべた。

身よりも無い上に得体も知れない人間を受け入れてくれて、部屋も食事も服もくれて、優しくしてくれた。

字が読めないと知ったときも、困った顔はしたけど怒ったり晒ったりしなかったし、覚えなおせばいい思い出すかも知れないからと本までくれた。

もしかしたら、ティアルダさんは私のことを死んだと思っているかもしれない。

そのほうがいいかもしれないな、と思った。

このまま帰れないんだったら、元の世界でも死んだことになってくれていい。

きつとお父さんとお母さんは心配してるだろうし、友達だって心配してくれてるだろう。

行方不明のままで心配をさせるくらいなら、悲しませても、『死んだ』ことになっているほうがいい。

「……そういえば、あの本ってなんだったんだろう」

そこまで考えてから、ふと昼間に読んだ本を思い出して、私は窓から視線を逸らした。

日本語で、私でも知っている童話ばかりが書かれた本だった。けれどタイトルと奥付にはこの世界の文字が使われていた。

この世界で、日本語の本が発行されたということだろうか。そんなこと、ありえるのだろうか。

「……んー……」

少し考えてみて、けれどよく分からなくて溜息を吐く。

一人きりでぐだぐだ考えたって、いい考えは出てこない。

とりあえず寝ようと考えて、私はその場から立ち上がった。

昨日は使わなかったベッドに近付いて、そのままその上に転がる。ドレスはしわくちゃになるかもしれないけど、他に服を貰っていないから仕方ない。

毛布を引き上げながらそんなことを考えつつ、私はベッドの上で眼を閉じた。

+++

何かを感じて目を開いたとき、そこにあっただのは銀と赤だった。

「よく眠るなお前は」

寄越された言葉を聞きながらぱちぱちと瞬きをしてみて、そこに居るのが何なのかを把握して飛び起きる。

「魔王！ ……様！？」

心臓がばくばくだ。

私の飼い主を自称する魔王が、どうして私の隣に寝そべっているのか。

体が大きいから、足がベッドの端から飛び出していて、かなり窮屈そうだ。そこまでするくらいだったら、柔らかいし絨毯に寝たほうがいいと思う。

私を見上げた魔王が、にやりと笑いながら起き上がった。

互いに座るとやはり向こうのほうが視点が高いので、私は彼を見上げる形になる。

「どうして、ここに」

訊ねながら、私はちらりと窓を見やった。

月は見えないし真っ暗ではないけれど、まだ明るくはなっていない。

夜明け前、と言ったところだろうか。

「どうにも眠れんからな。暇だからペットを構いにきた」

言い放つ魔王の手がこちらへと伸ばされて、私の髪を撫で付けた。多分、寝癖が付いていたんだろう。

「構うって……」

ようやく心臓が落ち着いてきたのを感じながら、私は小さく溜息をこぼす。

驚きすぎて、眠気が吹き飛んでしまった。どうしてくれるのだ。私の気持ちを全く知らない魔王が、私を見つめて目を細める。

「お前は人間にはおかしな奴だからな。大人しく構われろ」

「おかしな……」

よしよしと動物にするように頭を撫でられて、少しだけ眉を寄せ

る。そういえば、魔王は目が覚めたときからそんなことを言っていた。おかしな生き物、だとか。

髪は染めないがスカート丈は短め、成績は中の中だった平均的女子高生の私に対して、おかしいとは何事だろうか。

「何処がおかしいと？」

訊ねて見上げれば、私の問いを聞いた魔王が楽しげに笑う。

「まず、毛色だな。こんなに黒い奴は、人間の中では見たことが無い」

きつぱりとした言葉に、そういえば村には茶髪とか金髪が多かった、と思い出す。

ティアルダさんは何も言わなかったけど、色素の薄い人たちの中では、こういう色はやっぱり珍しかったんだろうか。

「それから、おかしな気配がする」

言いつつ、魔王の手が私の頭を離れて、するりと私の手を捕まえた。

ららんと輝く赤い瞳がこちらを見据えてきて、思わず身を引くけれど手をつかまれているから逃げることは出来ずに、魔王の目がじつと見つめてくるのを見つめ返すことしか出来ない。

「お前はおかしな生き物だ」

またもや失礼なことを言っ、まあだからペットにしたんだがな、と魔王は呟いた。

おかしな気配、というのはなんだろうか。

もしかして、私が別の世界からここへ来た事と、関係があるんだろうか。

問いたいけどそれは言えないままで、眉を寄せた私の手から、ゆっくりと魔王が指を離した。

「それより、ミツ。剣は何処だ？」

「え？」

預けるといったくせにそういわれて、私は目を丸くする。

さっさと出せ、と気にした様子もなく言われたので、はいと答えてからベッドを降りた。

それからベッドに座っている魔王を見やって、退いてください、と言葉を放つ。

魔王が、不思議そうに首を傾げた。

「何故だ？」

「その下にあるんです」

「……何？」

言われて、魔王が立ち上がり、ベッドをひよいと持ち上げる。

私が眠りに付く前必死になって動かしたベッドが、たった一本の腕に支えられていた。

「無いぞ」

元ベッドがあつた位置を見やって、魔王が私を振り返る。

ちよつと力が強すぎないだろうか、と思いつつ、私は魔王へ近付いた。

「そのまま、動かないでください」

頭の上にベッドを下ろされてはたまらないので、そう言いながら格子の側まで歩く。

そうして屈みこんで絨毯をめくり、押し込んだときと変わらぬ姿で入っていた剣をひよいと取り出した。

「こちらでよろしいですか」

言いながら視線を上げると、片手にベッドを持った魔王が、少しばかり呆れた顔をしている。

「……なんでそんなところに」

「隠したほうが良いのかと思いました」

問いかけに答えながら絨毯を直して、剣を片手に魔王の側へ戻る。大して重くもなさそうにベッドを下ろしてから、魔王は私から剣を受け取った。

金色の柄が、主の元に戻れたことを喜ぶようにぴかりと光を弾く。何かを確かめるように剣を見ていた魔王は、ふむ、と頷いてから、それをぽいっと絨毯の上に捨てた。

ごん、とちよつと重そうな音がする。

「……魔王様？」

一体何をしているんだろうかと思ってそれを見ると、屈んだ魔王が自分で落とした剣を拾い上げ、それからベッドへと足を向けた。

ほんの数歩で辿り着いたそこに座り、ついでのように寝転ぶ。やっぱり足がはみ出ているけど、魔王に気にした様子はない。

「ミッ」

「はい」

呼ばれて答えると、私を見た魔王がにやりと笑った。

「朝日が出たら起こせ」

そしてそう言い放ち、両手で剣を抱えたまま、そつと眼を閉じる。

驚き目を丸くした私の前で、数秒のうちに寝息が響きだした。

「……………寝てる」

そつと近付き、起きないのを確認して、そう呟く。

鼻をつまんでみても、瞼を押してみても、ちよつと触つてみたかった角を掴んでみても、魔王に反応はない。

熟睡しているらしい様子に、私はちらりと魔王が抱えている剣を見やる。

あの剣には、魔王が眠りに落ちる術が掛かっている筈だ。

もしや、眠れなかった魔王は、睡眠導入の為にその術を使つたんだらうか。

「……………だったら、自分で持っていればいいのに」

呆れた気持ちで呟きながら、私はベッドの上に唯一の毛布を掴んだ。

ずるりと引き寄せたそれを魔王の体に掛けてから、自分はベッド脇の絨毯に転がる。

絨毯も柔らかいし、あまり寒くないので、毛布がなくても問題はない。

それに何より、魔王に毛布を掛けずに私が使っているところなんかを誰かに見られたら、魔王にどんな告げ口をされるとも分からない。

やれやれと息を吐き、さつき魔王に吹き飛ばされた眠気を誘うべく、私はそつと眼を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3317p/>

気まぐれ魔王のお気に入り(ペット的な意味で)

2010年12月20日19時54分発行